

娘の選択：結婚するか独身のままか

ジョン・ヒョミン（韓国）

独身でいることは社会悪？

2019 年現在、周りの人々に自分が既婚者か未婚者であるかについて話す必要はないでしょう。しかし韓国ではこの現代社会においても、独身を貫くことは生き方として受け入れられておらず、男女を問わず結婚していないという事実は社会問題だと考えられています。韓国では、運命の結婚相手が現れるのを待っている独身者のことばかりを話題にしますが、非婚を選択した人のことが話題に上がることはありません。結婚することこそが安定を手に入れる唯一の方法であるという社会の考え方は、結婚しないことを選択した人々への否定的な認識を生み出しています。この考え方は、いわゆる“普通”の家族が社会の重要な要素であるという社会通念に基づいたものです。“普通”の家族という考え方では、男性は公の賃金市場で家族の生計を立てる責任によって、また女性はもっぱら家族という私的部門で家族や子供の世話を担い、出産をすることで社会の維持に貢献するのです。言い換えれば、もしも女性と男性が出会わず家族を作らなかつたら社会が維持できなくなるということです。しかし社会全体から見れば、このことは非婚に対する否定的な見方に過ぎません。

女性たちの中には、周りの女性が結婚し、キャリアを断念したのを目の当たりにし、そのため結婚しないことを選択した人もいます。少子化が進む韓国では、非婚の女性たちは、社会の中でより価値のない存在と見なされます。非婚の女性は、男女別の階層を脅かし、それまで“普通”の家族の中では安定して営まれてきた出産を通じた社会の維持を妨げていると非難されているのです。

非婚の原因

非婚を選択した女性たちは伝統的な家族秩序の役割を担うことを避けている無責任な存在なののでしょうか？マイクロミル社が 20 代を対象に行った調査では、非婚の最も大きな原因は、金銭的な負担や自分が一人の人間だという意識の喪失でした。しかし、その答えは性別によって大きな違いがありました。男性の回答は、高騰する住宅価格や生計の維持といった経済的負担を根拠にしたものでした。一方女性は、家事労働の負担や、義理の両親との関係、家族内の男性優位のジェンダーに基づく衝突、労働市場における経験の断絶などを理由として挙げました。つまり結婚した女性になることは、独身の間に築いた社会経済的な地位や関係を諦めて、“嫁としてのみ”の人生を歩むようなものと捉えられているのです。

このような考え方には、広範囲に及ぶ社会的な背景があります。韓国の女性の雇用率は 1985 年の 40.9%から 2016 年には 50.2%に増えました。女性の教育レベルは向上し、経済活動への進出は大きく進みました。しかしながら、家事労働におけるジェンダーギャップは未だに大きく開いたままです。2016 年の統計庁の仕事・家庭両立指標によると、共稼ぎ家庭の女性は今でも大部分の家事を行っており、女性が家事に費やす一日の平均時間は 3 時間 14 分なのに対し、男性が家事をしている時間はわずか 40 分でした。2004 年の調査では、共稼ぎ家庭で一日平均女性が 3 時間 28 分、男性が 32 分家事をしていたことをみると、状況はここ 10 年間何も変わっていません。

非婚に対する率直な意見

結婚しないという選択をすることは、伝統的な結婚や家族体系による支配、そして男女の階層について疑問を投げかける行為です。非婚の人々の数の増大は、“普通”であることの名の下に隠された抑圧に抗う重大な動きです。しかし、非婚をそのような社会問題として解釈すべきではありません。

非婚の現実には、むしろ、社会体系の中で確固として存在しているものと認識されなければなりません。このような認識が社会全体で共有できれば、既婚女性のキャリアの断絶や家事労働の分配などを中心にした問題を効果的に解決することができるでしょう。多様な生き方を否定したまま、既婚女性の生活の質だけを向上させ、未婚の女性にとって結婚と出産を理想的な選択肢とすることは、韓国社会が未だ“普通”の家族の呪縛に囚われていることを意味します。

選択する自由が保証されなくては、選択する自由はないに等しいこととなります。結婚しない自由が保証されて初めて自由が存在するのです。それゆえ、保証される必要があるのです。結婚はもはや強制されるものではありません。このような強迫観念から解放されてこそようやく女性の生活が多様なものとなるでしょう。

